シーワルドのアニマル達

◎世界最大のカニ、タカアシガニ

日本近海には、1,000種類を超える大小様々なカニ類が棲息していますが、ここでは世界最大といわれているタカアシガニについて紹介してみましょう。

4対の長い脚（歩脚）と1対の大きなはさみ（鉗脚）を持つタカアシガニはクモガニ科に属し、銚子沖から九州までの太平洋岸の水深50～200mの海底に棲息する、日本特産のカニです。雌は雄に比べると、はさみも甲らもさほど大きくなりませんが、十分に成長した雄では甲長が40cm近くに、はさみの長さが1.5mにもなり、はさみを広げた場合には3mを超えてしまいます。カニといえば、スナガニやイワガニのように砂浜や岩場をすばしっこく走る光景を思い浮かべますが、タカアシガニの動作は非常にゆっくりとしております。薄暗い海底を大きなはさみを振りかざし、長い脚でゆうゆうと歩いている姿は、カニの王者の風格十分といったところでしょう。当館に展示されている

●タカアシガニ（雄）

大きなタカアシガニを目の前にした人々からは驚きとともに、"生きているの？"とか"たくさん身があっておいしそう！"などの声がよく聞かれます。房総ではタカアシガニをオオバガニと呼び、毎年12月から3月まで獲れ、食用にすることもありますが、あまりにも大きなために調理が大変なことと、肉が非常に水っぽくて大味であることなどから、あまり重宝がられておりません。このことがタカアシガニを乱獲から守ってくれているのかもしれません。

（祖一記）

鴨川シーワールドふるさと正月

鴨川シーワールドでは元旦から4日まで「'79ふるさと正月」と題し、もちつき大会、ぬいぐるみ大行進、竹馬コーナー、焼いも即売コーナー等の催し物を行い、ご来園のお客様に正月の雰囲気を楽しんでいたゞきました。

ことに近年一般家庭では珍しくなった臼、杵を使用してのもちつき大会は大変な人気で、チビッコたちが参加賞の豆しぼりの鉢巻をし、かけ声も勇しく餅をつきあげ、つきたての餅をおいしそうに頬張っている光景があちこちで見られました。

また、焼いも即売コーナーではご来園のお客様に格安で販売致しましたところ長蛇の列が出来るほど好評を博しました。

鴨川シーワールド動物友の会事務局
〒296 鴨川市東町1464—18 TEL 04709（2）2121（代）

さかまた

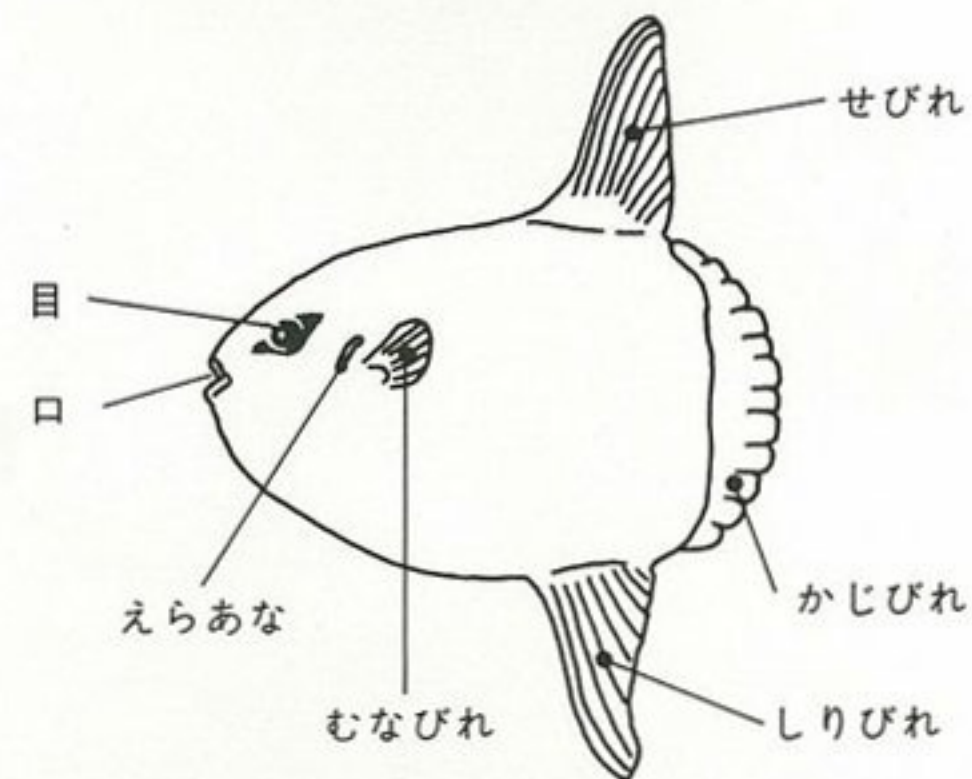
鴨川シーワールド動物友の会 会報 1979・2—11号

●係員から餌をもらうマンボウ

◎マンボウの飼育

シーワールドではオープン以来８年間に、24匹のマンボウを飼育しました。前回迄の最長飼育記録は79日間でしたが、昨年の３月３日に搬入したマンボウが270日間の飼育記録を作り、さらに更新中です。今回飼育しているマンボウは鴨川市の沖合20キロの海面にセビレを出して泳いでいるところをイカ釣り船に発見され、たも網ですくわれた個体です。このマンボウを捕えてくださった伊東さんの話では、鴨川附近では、海面の水温が20℃ぐらいで冷たい底潮がさす時に、よく見かけるそうです。１メートル以上のマンボウは海面に横たわり、いわゆるマンボウの昼寝と呼ばれる状態で、50センチぐらいのは水面近くを泳いでいるのが多いとの話でした。

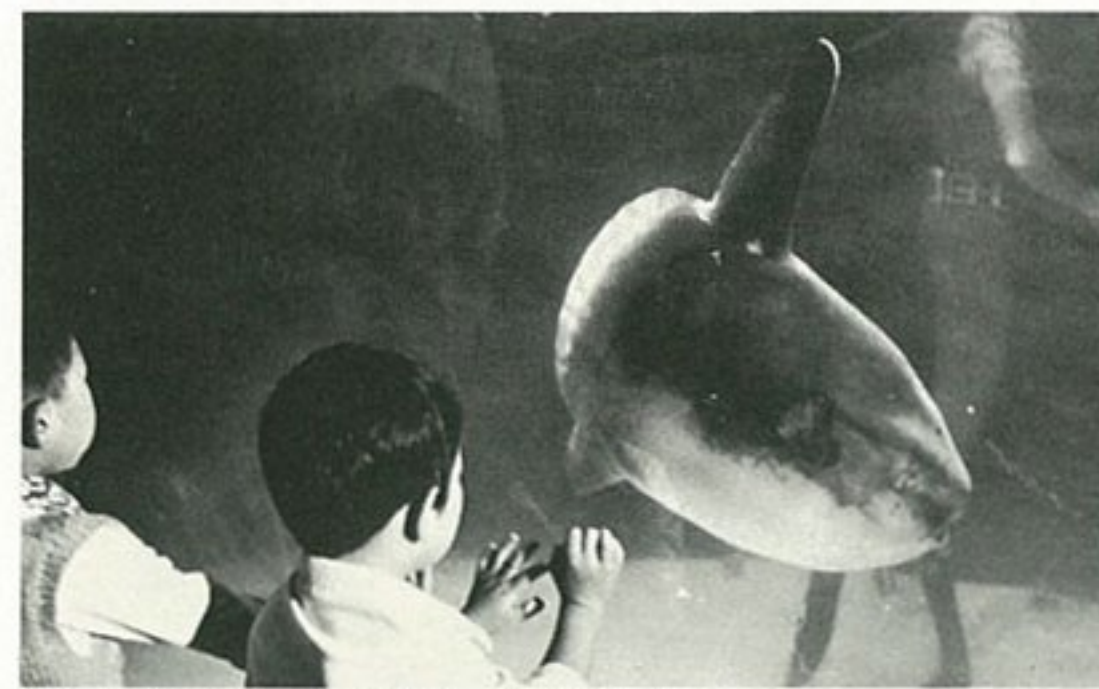
マンボウはフグ目、マンボウ亜目、マンボウ科に属する魚類で、体長３メートル、体重１トン以上に成長します。学名はMola mola(Linné)(ラテン語でモラは碾臼のことで、丸い体つきの意）漢字で翻車魚（水車の型の意）英名をサンフィシュ、ムーンフィシュ（円型の魚の意）と言います。マンボウは写真のように横から見ると玉子にセビレとシリビレをつけたような形で、オビレがなく愛くるしい大きな目をクリクリ動かしながら泳ぎ回り、係員が近づくと水面に出て来て餌をねだります。体色は薄紫ぽい灰色ですが、興奮すると銀色の斑紋が出たり、全身が銀色に輝きます。一見不格好に見えるマンボウも、上から見れば素晴らしい流線型で、体の上下にあるセビレ、シリビレを左右同時にボートのオールを漕ぐように振り、小さなムナビレを動かしてバランスをとりながら泳ぎます。

マンボウはクラゲを食べる魚と図鑑などには書いてありますが、最近の調査ではクラゲと同じぐらいヒカリボヤの仲間を食べていると言う事が判

って来ました。そのほかには浮遊性の甲殻類（オキアミ類など）小型魚類（ハダカイワシ、カタクチイワシなど）、やイカ類を食べています。しかし水族館では、クラゲやヒカリボヤは入手しにくいためエビやアサリ、イカ、小型魚類を与えています。

飼育開始当時のマンボウの大きさは約55センチ、推定体重8.5キロでしたが、ビタミン剤を添加したシバエビのムキ身を、毎日体重の1.0から1.5パーセントぐらいを手から直接給餌しました。10月10日から２週間、一般公開しましたが、その時の体長は飼育開始から222日目で、75センチに成長していました。

皆さんはなぜマンボウは短い日数しか飼育できないのかと考えていることと思います。マンボウは外洋性の魚で大海原というどこまでも広い環境に適応し、進化してきた魚です。このため色に対する感覚や餌の嗜好性とか、本能として摺り込まれてきた事柄とフグ目の魚の生態とがミックスされた現象として現れます。河を遡るサケやマス類の稚魚を青い壁面の水槽で飼うと、体色は親と同じ銀色に変化し壁面にぶっかるようになります。これは目から入る青い色の刺激でホルモンが分秘され、体色が銀色になるのと青色の壁を大海原と思い、ぶっかりはじめるわけです。マンボウも同じ様に青い色の環境に適応しています。水族館の水槽の壁面は、皆さんが見て、海の広さを連想するように青く塗ってあります。

そうゆう水槽にマンボウを入れると壁面に激突して死んでしまうのです。

こうゆう原因を一つ一つ解決しながらマンボウを飼育したのですが、ここで1960年に広島県、宮島水族館で21日間の記録を作って以来、19年間に多くの水族館で試みた、各館の最長記録ベストセブンをあげてみましょう。1978年千葉県・鴨川シーワールド270日（11月28日現在生存中）1978年

●一般公開され人気者となったマンボウ

高知県・桂浜水族館166日、1973年ロスアンジェルス・マリンランドオブパシフィック　約110日、1978年宮城県・松島水族館138日（11月28日現在生存中）、1972年和歌山県・京都大学瀬戸臨海実験所白浜水族館 47日、1970年神奈川県・油壺マリンパーク 37日、1972年和歌山県 串本海中公園センター 37日となります。当館の270日の飼育記録は、これらの19年間に渡る貴重なデータを利用することによって、初めて可能となったのです。今回も水槽の壁面に関連した一つの実験を試みました。マンボウは泳ぐ速度が遅くても体重が大きいので慣性力が大きく、このため壁面に衝突すると大きな力がでて頭蓋骨骨折を起こしてしまいます。その原因は前に書いた青い色の他に、水温や水質などの生息環境がちょっと変化しただけでも起ります。当館で79日間飼育した個体も解剖して見ると、頭蓋骨骨折を起していました。そこで激突を防止するために、水槽の中にマンボウが識別しやすいと思われる黒いビニールフェンスを張り巡らしました。マンボウはビニールフェンスにそって泳ぎ廻っていますが、ときどきフェンスにぶつかります。でも、コンクリートの壁面から20センチぐらいフェンスが離れているため直接コンクリート壁にぶつかることはなくなりました。270日を超える飼育記録には、このビニールフェンスの果した効果が最も大であったものと考えられます。

現在マンボウは飼育開始当時の約3倍の広さ（長さ８メートル、幅３メートル、深さ２メートルのビニールフェンスを張り巡らした）のプールで記録を更新中です。

これからの私達の目標は、このマンボウを、長く飼いつづけるようにすることはもちろんですが、マンボウを２匹、３匹と長期飼育し他の魚と同じように、いつでもガラス越しにマンボウが観察できる日を一日も早く完成することにあります。

（榊原記）

●海から水族館のプールへ搬入されるヨシキリザメ

トピックス

◎ジョーズ飼育に挑戦中

今年の７月より外洋性サメ類の飼育にチャレンジしてみました。外洋性のサメ類の呼吸方法は口を半ば開いたまま泳ぎ、えらに水を送って呼吸をしています。そこで釣り揚げられたサメには泳いでいる時と同じ速度の水流を口から入れてやり、身体が硬直したりケイレンを起さないようにボディマッサージをしながら運ぶことにしました。ヨシキリザメやヒラガシラはうまく運ぶ事が出来ましたが、しかしアオザメは船の上に準備された特別水槽に入れて１時間後にはヒレに充血が見られ死んでしまいました。ヨシキリザメやヒラガシラは船からトラックに乗せ換えて水族館に運びこまれましたが、プールの形、大きさ、色などのまだ多くの問題があり、最高６日間しか生きてくれませんでした。これからも外洋性のサメの飼育を試み、アオザメをはじめとした外洋性のサメ類を観覧することが出来る水族館にしたいと考えています。

（平塚記）

表紙説明

マンボウの舵鰭

マンボウには、一般に魚で尾鰭と呼ばれている鰭がありません。尾鰭は遠い古い時代に尾鰭の骨格と尾鰭を動かす筋肉が退化したときに、消失してしまったのです。からだの後についている一見尾鰭のような鰭は、背鰭と臀鰭の一部がつながってできた鰭で、泳ぐための鰭でなく舵をとるだけの役目をする舵鰭です。泳ぐための鰭は、からだの上下にある大きな背鰭と臀鰭を使います。

（榊原記）